

▶複式学級での実習(後方で直接指導している間、手前では間接指導が行われている)



北海道教育大学

▶へき地校体験実習

へき地の小規模校で
生徒一人ひとりに向かい合い
地域と学校が協働する
教育を学ぶ

学校・地域教育研究支援センター
へき地教育研究支援部門

北海道では、国からへき地の指定を受けている小学校が全体の50%を超える。過疎化による児童生徒数の減少は止まらず、全校児童が10人に満たない小規模校も多い。2つの学年で編制する複式学級は1000以上、2位の鹿児島県の2倍以上だ。

複式学級では、2つの学年を同時に指導するので、たとえば教師が3年生を教えているときに、4年生の生徒は自分たちで学習を進める。教師は毎時間2つの教材研究を行って授業に臨むだけでなく、実際の授業では直接指導を行っていない学年に対しても目を向けていなければならないからたいへんだ。

へき地・小規模校での教育は、かつては現場で先輩教員から後輩に伝えられていた。しかし現在では、学校統廃合が進んだために、経験を積んだ教員が少なくなり継承が困難になっている。札幌、旭川、釧路、岩見沢、函館に分校を設置して全北海道の教育をカバーする北海道教育大学が、へき地校体験実習を教員養成カリキュラムに位置づけ、学生がへき地校での教育実習を体験できるようにしたのはこうしたことが背景にある。

この実習は、小規模校で生徒や地域の人々との人間的ふれあいを望む多くの受講生を集め、卒業生をへき地教育の現場に送り出す成果を出し続けている。



▲複式学級での実習(L字型での指導。前の4人は直接指導、左手前は間接指導)

授業&ゼミ・研究

編集部イチ押し

大学の授業は、一方通行的な講義形式から、自ら現場に飛び込んで問題を見つけ解決するという、参加型・問題解決型に大きく変化している。その中から編集部がイチ押し授業を紹介する。(本誌5月号)